

トレーディングスタイルと FED のポリシー

古い話で恐縮だが 70 年代後半、「2 円に行く」とのフレーズが一時流行った。為替ディーラー達の間だけのことだが、トイレ行くことだ。日々の為替レートの変動が激しく、ディーラーがトイレに行っている間に 2 円も動いてしまったとのエピソードに由来する。

こうした局面でのディーリングで大事なことは一つの損を気にしないことだ。ロングでダメならショート、ショートでダメならロング、損を取り返すチャンスはたくさんある。自分のポジションにあまり執着しない方がいい。とにかく 1 か月、3 か月、あるいは 1 年のタイムスパンで利益を積み重ねればいい。

最近のドル円相場の変動もかなりもものだ。7 月中旬には 140 円に近付いたが昨日は 130 円台まで下落した。その後 133 円台に戻し、現在は 2 円台から 3 円台で変動している。

この局面でドル円のロングを持っていた人は損を被ったろうが、そうした人の多くは 130 円を超えてドル円が上昇した局面で利益を上げているはずだ。逆にドル円の上昇に懐疑的だった人はドル円の反転局面では損失を被らなかったが、上昇局面では上手く立ち回れなかったはずだ。

今回の反転局面のトリガーは、FED のパウエル議長が今後の利上げペースのスローダウンの可能性を示唆したことだ。それでドル円の金利差の拡大に歯止めがかかり、ドル円の先安観が生まれた。

それともう一つ、彼は大事なことを言った。データドリブン。データに基づいてその都度政策を考えると強調した。ECB もそうだが、従来のフォワードガイダンスからデータドリブンに比重を移す。データ重視と言うと聞こえはいいが、要は先が見通せないということだ。インフレ抑制とリセッションの回避、このバランスを政策上どのようにマネージするかを、データを見ながら決める。

こうした政策スタンスは市場的には変動率の上昇に繋がる。トレーディングのチャンスが多くなるということだ。一度作ったロングあるいはショートで失敗しても取り返すチャンスは十分ある。

再び古い話になるが「2円へ行く」の頃、シカゴの先物市場が為替で猛威を振るっていた。そこで活躍していたディーラーに話を聞きに行ったことがあった。ポジションの入り方はどうでもいい。自分はあまり気にしない。買いでも売りでもそのポジションをどうマネージするかだ。売りでダメなら買いに転じればいい。その繰り返した。自信满满だったこのディーラーのトレーディングスタイルは変動率の高い局面では合っていたのだろう。

今後インフレ、雇用、景気などの経済指標に市場は一層敏感に反応して変動を繰り返すはずだ。